

アメリカ人の女性 *American Woman*

October 12, 2021

By Senior Airman Brieana E. Bolfing
374th Airlift Wing Public Affairs

彼女が何気なく人で溢れたホールに入っていくと、スピーカーから突然音楽が流れてきた。彼女は誇らしく飾られた何十本ものアメリカ国旗の横を通り入って行く中、「アメリカン・ウーマン」(レニー・クラヴィッツの曲)の歌詞が会場に響き渡った。全員が椅子から立ち上がり、万雷の拍手を送った。

第374医療支援中隊司令リサ・グズマン中佐は、彼女がやっと米国市民になれた時に仲間のウイングマンたちが企画した祝いを思い出し、涙を流した。

グズマン中佐は、「私はメキシコで生まれて育った。15歳でグリーンカードを取得し、高校進学のためにカリフォルニアに移り住んだ。卒業後は印刷会社で働き始めた。それは、軍隊に入隊する前の最初で最後の仕事だった。過酷な労働だったので、大学との両立は難しかった」と振り返った。

しばらく悩んだ挙句、グズマン中佐は自分に変化が必要だと気づいた。友人のアドバイスで、彼女は地元のリクルーターに連絡を取り、情報を集めた。

そのリクルーターは、その時の成績に基づいてアカデミーに進むことを勧めたが、入学書類を記入していくうちに、グズマン中佐は最初の壁にぶち当たった。

グズマン中佐は、「空欄にしていた項目が1つあり、それは帰化か米国市民かというものだった。リクルーターに指摘された時、私は“どちらでもない”と答え、グリーンカードを持った移民であることを伝えた。すると、そのステータスではアカデミーに入学の申込みができないと言われた」と語った。

リクルーターは、すぐに別の選択肢として、入隊を提案した。

「(入隊後の)可能性について考えたことを覚えている。自身のとても質素な環境での育ちを考えれば、夢のような話だった。入隊のメリットを考えると、喜んで“入隊したい”と答えた」とグズマン中佐は言った。

兵役すると、わずか3年で米国市民になるという恩恵もあった。

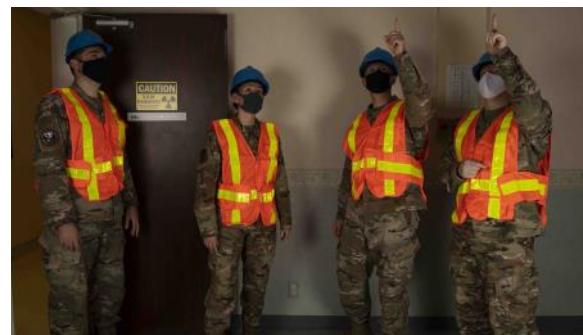
グズマン中佐は、「再入隊する前の週に、アトランタで市民権を得るために面接を受けた。再入隊前に市民権を得ていなければ、兵役を続けることができないからだ。私は面接に合格し、その場で宣誓した」と言う。

ひとりで法廷に立った彼女は、宣誓し、米国市民としてのスタートを切った。

家族や友人は見に来ていなかったものの、彼女は自身の達成感に誇りを持っていました。

しかし翌日、彼女は「アメリカ人の女性」となった祝いを受けて驚いた。

グズマン中佐は、「仲間のウイングマンは、私の家族でもあると実感した。それ以上に、皆が私を受け入れてくれたことに感激し



た。空軍の家族は、私がやっと市民権を得られたことを祝ってくれた」と述べた。

「そのサポートが、私の背を押してくれた。基礎訓練から市民権の取得、そして将校になるまで、すべてが人生の転機だった。それらの時を、新しい家族と一緒に分かち合い、祝うことができた」と続けた。

空軍には、教育の機会や世界を旅できること、さらには米国市民権の取得など、多くのベネフィットがあるが、グズマン中佐には、ヒスパニック系アメリカ人として最も大切な恩恵があった。それは、始まりがどうであったかに問わらず、空軍には常に家族がいるということを実感できることだった。